自分の考えを持ち　友達とかかわりながら　学び合う授業

木谷　崇

1　条件設定に当たって

子どもは，本来好奇心旺盛で知りたがり屋である。このような特性を生かし，授業においても積極的に課題を追求していく子どもの姿を求めていきたい。

課題に取り組むとき，まずは自分で考えをもつことが必要である。その後，他とのかかわり合いをもつことで，自分の考えを積み上げ，よりよい解決方法を見つけ出していく。共に課題を解決していくことによって学び合いの学習，深まりのある学習が成立するものと考える。

授業の中に，このような学習の姿が見られるには，以下の条件が必要であると考えた。

- 条件Ａ　交流を行う必要性があること
- 条件Ｂ　交流が生きる適切な場があること
- 条件Ｃ　自他の意見や考えを認め合えること

2　条件について

・条件Ａ　交流を行う必要性があること

交流を行う必要性は課題と密接に関わっている。子どもが問題や課題を解決していくとき，授業の中で「どうしてそうなるのかな」という驚きや疑問から「何とかその問題を解決したい」という共通する意識が生まれ，友達との交流の必要性が生じ，その驚きや疑問から課題を解決した達成感は，次の学習の意欲にもつながる。

また，交流を通して友達の考えに触れることで，自分の考えを振り返り，友達の考えとの違いに気づくことになる。友達の新しい考えに出合うことは，これまでの自分の考えを訂正したり，新しい発見を生み出したりするきっかけにもなる。このように，互いに影響し合いながら，問題や課題を解決していく。そのような学習を繰り返すことによって，友達と交流することの良さを実感していく。これは，一斉学習のよさでもある。

・条件Ｂ　交流が生きる適切な場があること

交流の場面が意図的に設定されることで，学習活動は活発に行われることになると考える。しかし，それは一方的に教師側から与えられるものではなく，子ども自身が必要感を持つものでなくてはならない。そこで，交流の場を二つの視点でとらえた。一つは形態，もう一つは目的である。

形態とは，ペア・グループ（班別，目的別）・クラス全体などのグループ構成についてである。目的とは，授業の中でどのようなねらいをもってかかわりをもつかである。子どもが話し合いの必要感をもったときと，授業者が設定した場面とが一致すると，子どもの思考がより活発になる。

最終的には，「ゆっくり二人で意見を交わしたい」「なるべく多くの意見を聞きたい」「自分の疑問に合わせて話をする友達を決めたい」といった個人の目的に合わせて，形態を選べるようになってほしいものである。

・条件Ｃ　自他の意見や考えを認め合えること

コミュニケーションの土台として，温かい人間関係が欠かすことはできない。問題を解決する際には，集団の支えがあって初めて，意欲を持ち解決に向かえるからである。友達のおかげで自分の考え方が深まることができた経験が，「次回も自分の考え方を友達と交流して深めていこう」，「次は自分が友達の役に立ちたい」という意欲につながる。

また，考えを持てた子どもが，考えをもてない子どもに教えるような場面も考えられる。その際にも，一方は「自分の考えを分かってもらおう」という思いをもち，他方は「分からないところを友達から教えてもらおう」という気持ちをもつ。しかし，そこに人間的な上下の関係があっては，学び合うという姿には結びついていかない。そこで，失敗が許されるような学級の雰囲気作りが重要となる。一人一人の良さが認められ，安心できるあたたかい学級づくりが求められる。

3　おもな実践

・条件Ａ　交流を行う必要性があること

交流を行う必要性を高めるためには，問題や課題の質が重要となる。言うまでもなく，それらは，ねらいに即していることは勿論，子どもにとって解決可能であること，ほどよい抵抗感があること，興味関心がもてるものであることが大切である。それらの問題・課題について学習を進めていくにあたっては，全員が一人で解決できない場面が出てくる。自ずと友達とのかかわり・交流しながら課題を解決する必要となる。

どのような場面で，交流を必要とする意識の高まりが見られたか，また，友達と交流することの良さを実感することができたかを実践を通して述べてみたい。

⑴ 算数科「表とグラフ」における実践

この単元では，子どもの「何とかその問題を解決したい」と思うような共通する意識の高まりからスタートした。学習のねらいは，「簡単なことがらを分類整理して，表に表すことの良さを知る」ことである。問題の設定を「２年３組は，何月に生まれた人が多いでしょうか」とした。

問題を投げかけると「クラスの友だちの誕生日について，知っている子もいるけど，知らない子もいるよ」「みんなの誕生日を調べないと分からないよ」「人数が多すぎるから，調べることができない」と感想を持った。そこで，誕生日が書かれた資料を配布し，一人一人で考える時間をもった。しばらくすると，「４月は２人だ」「いや３人だよ」と隣同士で交流が始まった。さらに「数え間違いじゃない。」「日だけで数えたら間違えやすい。」と交流の輪が広がっていった。こうして，隣同士の交流から，クラス全体の課題となった。また，同じように最初の隣同士の交流が，授業後半での「数え終わったら丸をつけたらいい」「正という字を使って，整頓したらいいよ」と，落ちや重なりをなくする方法を話し合う活動へとつながっていった。

子どもの「問題を解決しよう」という気持ちから，かかわりが始まった。問題意識の高まりから交流の必要感につながった例である。

⑵ 生活科「野菜を育てよう～さつまいもを一年生と植えよう～」における実践

子どもは，昨年，２年生と共にさつまいもの栽培をしている。そこで培った経験を生かし，本年度は上級生として，１年生にさつまいもの特徴や成長，植え方，さらに収穫の喜びや楽しさを伝える授業を設定した。さらに，説明場面では全員が一対一で説明する機会をつくった。

子どもは，自分が１年生に教える立場になることを知り，関心が高まった。自分が，１年生に説明するイメージを持てたこと，上級生として「１年生の役に立ちたい」という思いから，必要感を持続し，活動することができた。

昨年の振り返りの場面では，多くのサツマイモに関する知識が発表された。（資料１）しかし，自分の知識を披露することで満足していたことから，「１年生は何を知りたがっている？」と問い，さらに「１年生にサツマイモについて伝えたいことをせいりしよう」との課題で授業を行った。子どもは，活動の目的がはっきりしていたことで，再度，聞く側の立場で考えることができた。そのうちに「『植える・育てる・収穫する』ことを必ず伝えたい」と話し合いは収束していった。

その結果，①サツマイモは苗で成長し，根っこが太ってサツマイモになること，②苗植えは土に斜めにさしこみ，土をやさしくかけること，③水やりや雑草抜きの世話をし，秋に収穫することの三つを伝えることとなった。実際の交流場面では，三つのポイントを伝えた後に，さらに，事前の授業で話し合った「葉の形」や「蔓での遊び方」についても話をしていた子どもが多かった。

・五郎島金時というのが有名だ。
・サツマイモは種ではなく苗で植えるよ。
・葉っぱの形はハート型だな。
・去年は一番大きな葉っぱは顔くらいの大きさになったよ。
・根っこが太ってサツマイモになるよ。
・雑草抜きが大変だったけど，大切な仕事だな。水もあげたよ。
・サツマイモは中が黄色で外は赤紫だ。
・サツマイモは秋に収穫するよ。
・焼き芋がおいしいよ。大学芋っていうたべものもあるよ。
・去年は腕ぐらいの太さのものも収穫したね。
・蔓でリースや縄跳びをして遊んだよ。

⇩

１年生は何を知りたがっている？

⇩

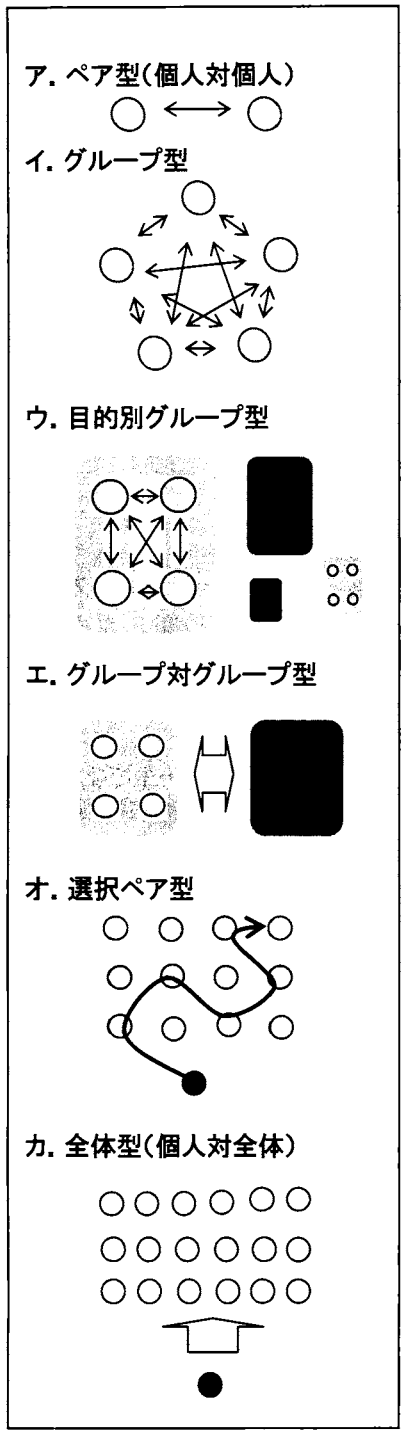
三つのポイント

資料１　一年生との交流

A児：ぼくはCさんの考え方がDさんより分かりやすかった。今度から，人の考えを，ちょっとあわせてみて自分の考えをもっとよくしたい。

B児：Eさんから，cmの間に目盛を入れるのを教えてもらった。私はEさんのおかげで分かった。

資料２　子どもの作文より



資料３　形態のバリエーション

子どもの話し合いの中から，三つのポイントに絞ることや世話の話を中心にすることが決まっていった。「野菜を育てよう～さつまいもを１年生と植えよう～」という課題から，全員が教える立場としての責任を自覚できたことや，「１年生に教えてあげたい。」という気持ちの高まりがあったこと，「お兄さんお姉さんとして，確かな知識を伝えなくてはならない。」という強い思いが，交流の必要性が生まれた理由といえよう。

(3) 算数科「長さ」における実践

子どもは，cmの学習で，ブロックいくつ分，おはじきいくつ分という任意単位の考え方を交流し，その不都合性から「世界共通のブロックが必要だ」という普遍単位の有用性を導き出した。

次にmmの導入で，大きな紙を提示し，はがきを手作りするため，長さを測定した。横の長さは 10 cmちょうどであったが，たては 14 cmと 15 cmの間であった。そこで，問題の設定を「１cmより短い長さを測るには，どうしたらいいのかな」とし，「はした」の部分をどのように表すかについて考えた。それぞれの個人の考えを交流した結果，おはじきの厚さいくつ分かで考える方法や，１cmを半分に分けて「○cm半」と表す方法を出し合った。

その日の作文に，授業で友だちとの交流のおかげで自分の考えを深めることができたという内容の記述があった。（資料２）

自分と友達が影響し合いながら，問題や課題を追求・解決していく。そのような学習を繰り返すことによって，友達と交流することの良さを実感した例である。

・条件Ｂ　交流が生きる適切な場があること

誰と，何のために交流するかによって，それぞれに適した形態があると考える。

また，学習過程の前半・中盤・終盤で，それぞれ「課題の確認から見通しをもつ」「友達から新しい考え方やものの見方を知る」「自分の学びの成長を実感する・自分の不確かであった知識を補強する」などと，交流の目的は変わってくる。

以下，交流が生きるために，どのような目的で，どのような形態の場を設定したかを，子どもの姿を通して述べていきたい。

(1) 算数科「表とグラフ」における実践

「筆算」につながる「10 のまとまり」の考え方『「20＋50」は，10 のまとまりが２つと５つで，合わせて７。10 のまとまりが７つで 70。』の理解が不十分な子どもがいた。そこで，理解を図るため，一回目は，「ペアでの説明し合う場」（資料３　図ア）を設定した。さらに理解を確かにするため，二回目は選択ペア型の交流の場（資料３　図オ）をもった。それは，説明できる友達の中から選んで，質問に行くという方法である。説明できるようになった。子どもは，次は，説明する方に立場を変え，交流を行った。また，説明途中で理解できていない部分を発見したときは，質問する立場になって交流を続けた。子どもは，説明の方法として，おはじきやお金，図・式などさまざまな道具を使い分けて説明していた。

交流の際には，仲の良い友達という理由だけではなく，誰に質

問するかを考えて交流する姿がみられた。また，うまく道具を使っている友達や順序よく説明している友達を見つけて交流していた。

⑵ 国語科「たんぽぽのちえ」での実践

「たんぽぽのちえ」では，本文中の「『しめりけ の多い日や，雨降りの日には，わた毛のらっかさんは，すぼんでしまいます。』のところは，ちえ の一つとするか，しないか」という疑問が子どもから出てきた。そこで，確認すると，クラスの意見が「する」「しない」に二分された。

そこで，同じ意見のグループで集まり（資料３　図エ），どうしてそう考えたか，考え方のどこが似ているかを話し合った。そのことで，自分の考えを補強し，学習の見通しをもつことができた。

さらに，他方の考えやものの見方を知るために，他方のグループの友達とペアをつくり意見の交流を行った。５分間の交流タイムを３回設定し，その度に自分の立場を確認した。

「ちえ に含まれる」は，１回目１４人，２回目１６人，３回目は２４人。「含まれない」は１回目２１人，２回目１９人，３回目１１人と推移していった。このように，交流タイムをもつ度に，当初の意見の人数からどんどん変化し，意見が逆転した。

意図的に，話し合いの形態を目的にあわせて設定することで，クラス全体の考え方に変化が見られた例である。何よりも子どもは，クラスの友達の意見が話し合いの度に変化していく様子を目の当たりにし，違う意見の友達と意見を交流することの大切さを実感した授業であった。

・条件Ｃ　自他の意見や考えを認め合えること

前に述べた「10 のまとまり」での実践においても，選択型（資料３　図オ）の交流を行った。その経験を生かし，繰り下がりのある筆算の知識定着の場面でも，同じように選択型の交流の場を設定した。その際には，教える側も教えられる側も上下の関係はなく「教えてあげるよ」「教えて」とかかわりをもつことができた。しかし，算数科「繰り下がりのある筆算」では，繰り下がりを忘れて筆算の計算をしてしまった児童について「 違います」と指摘し，自信をもって正答を発表する子どももいた。

正答を重視しすぎると，自分の発表に対して臆病になったり，間違った意見を軽んじたりする傾向の子どもがでてくる。また，友だちの意見を理解していないにも関わらず，分かったようなふりをする子どももでてくる。今後は，「今の説明のここの部分が分かりません」「ここの部分が自分の考えとは違うな」「こんなふうに考えたら，解決できそうだ」といったことばを使えるようにしたい。

実践「たんぽぽのちえ」の交流では，子どもの言葉に「どうして？」「なぜ？」が多用されていた。分からないときにこそ「どうして？」「なぜ？」が出てくる。その際，友達の意見を聞き自分の思考を深めていた姿を評価した。さらに，「聴く」ことは，発表者を尊重することにつながることも機会を捉えて指導している。

今後も，自分の考えを持つこと，友達の考え方を尊重すること，交流し合うことで，新しい知識を獲得する楽しさを味わわせていきたい。

４　今後に向けて

これまで，条件Ａ・Ｂ・Ｃについて，クラスでどのように取り組んできたかを述べてきた。

条件Ａについては，魅力ある教材や教具の工夫も必要であると感じた。また，学習の中で，日常生活と同じような自然な形で「コミュニケーションをとりたい」と思わせることが大切であると感じた。それは，日常生活でも子どもは，友達同士でかかわりをもち影響し合い，遊びや係活動・行事などで，同じ目的に向かって活動している。その場合，友達と共同して作業や，コミュニケーションを行う機会も多く，進んでかかわり合いをもとうとする子どもの姿が見られるからである。

条件Ｂについては，まだまだ子ども自身で，目的に合わせて形態を選べるようになっておらず，現在はいろいろな形態のバリエーションを経験させるにとどまっている。今後は，目的に合わせて相手を選ぶことなどを通して，学習の形態を子ども自身が選べるようになってほしいものである。

しかし，何よりも人間関係としての条件Ｃは欠かせないものであり，学習の中でより高めていくものであると感じている。

今後は，条件Ａ・Ｂ・Ｃについてより良い手だてがとれるように，引き続き探っていきたい。